

## 名誉をめぐる攻防

### —「魔女」の名誉棄損訴訟と司法利用の戦略—

小林 繁子（新潟大学准教授）

第九回シンポジウム（2018.09.22）

本報告では「法の利用」という観点から、ヴェストファーレン公領など北西ドイツ地域を中心に魔女と非難された人々による名誉棄損訴訟を検討した。この地域は隣接領邦と裁判権が複雑に重複し、また領内の上訴制度も曖昧な中小領邦が多い。そのことは「不十分な近代性」と見なされる一方で、司法を利用する側にとって選択肢を広げる可能性をもつ。

まず魔女中傷に対する対抗策として水審、下級裁判所の慣習法に基づく簡易的裁判を検討した。水審は13世紀には学識法の世界では法的有効性を否定されたが、安価にまた即座に自身の潔白を印象付けることができ、貧しい者にとっては魔女疑惑の初期消火としては合理的選択肢の一つだった。罰金手続きなどの簡易裁判では名誉に関わる案件が多数あり、その中でも「魔女」や「妖術使い」といった中傷は一定の割合を占め、他の「泥棒」「悪党」と言った悪態に対するよりも高額な罰金が科せられた。

他方、罰金手続きが中傷者のみを聴取の対象としたのに対し、学識法に基づいた名誉棄損訴訟では両当事者に弁明の機会が与えられた。法の専門知を持つ弁護人が用いられることも多く、判決には学識者の助言が求められた。弁護人の費用、学識者への鑑定依頼、証人一人ひとりへの聴取など、名誉棄損訴訟は費用と時間を必要とした。名誉棄損訴訟では刑事訴訟と民事訴訟が区別されていた。罰金手続きでは罰金は中傷被害者ではなく国庫の収入とされたのに対し、民事的名誉棄損訴訟では原告が賠償を要求できた。刑事的名誉棄損訴訟では被告に対して短期間の禁固や笞刑・さらし刑などの名誉刑・領邦追放などの刑罰が科されえた。名誉棄損訴訟においては魔女疑惑をかけられた者が証人を指名して彼らの名誉を証言させ、潔白を証明する主導権を握った。水審が潔白を示すだけで防衛に徹するのに対し、民事的には賠償を、刑事的には刑罰を求めることで、中傷者への積極的な攻撃も可能であった。しかし同時に原告は訴訟において被告側の証言による侮辱に直面する危険もあった。

本報告では、具体的にどのような人物がどのような背景において名誉棄損訴訟を利用したのか、ヴェストファーレン公領の小貴族フォン・エスレーヴェと富裕農民クリスティアン・ホーベルク、マルガレーテ・フォルマースとの間で1605年から1614年にかけて争われた裁判を取り上げた。この事例からは隣人間の紛争という背景、また害悪魔術などの典型的な告発、度重なる上訴を重ねた上に係争中に両者が裁判外で和解するなど、興味深い要素をいくつも見る事ができる。原告と被告の主張の応酬からは、地所への人畜の立ち入りによる被害など日常的な諍いが両者の間にあったこと、原告ホーベルクが被告の中傷に対して暴力で対抗し、さらに被告の息子が報復に

原告の地所内で発砲するなど、法廷外での争いもエスカレートしていたことが看取できる。被告側証人への質問項目は土地作物や家畜に対する害悪魔術、魔女集会、悪魔との愛人関係などを示唆しており、刑事的な魔女犯罪の告発に酷似している。名誉棄損訴訟はこうした告発に等しい非難にさらされる場ともなった。一審判決は被告に中傷・誹謗を撤回の上、賠償を命じるものであったが、被告は即座に上訴し、二審をヴェアルの教会裁判所で、三審をケルンの教会裁判所で争った。いずれも被告敗訴という結果になったが、三審判決に先立ちすでに両当事者は裁判外で和解していたという。被告は帝国最高法院に上訴しているが、一審判決の執行を極力先延ばしし、裁判費用の支払いを拒否する以外の理由は想定しがたい。

名誉棄損訴訟は証人をそろえ、法専門家を雇い、長期にわたる裁判に耐えうる社会的・経済的資本を備えた人々にとっては有力な選択肢だった。裁判機構の管轄の重複・審級制の未確立などから、状況に応じた主体的な選択も可能であった。エスカレートした紛争解決の手段を裁判に求めるものの、手続き問題に論点を徐々に移し、魔女中傷という致命的な対立のフェーズを脱して和解へと軟着陸する。「魔女」という絶対的他者を作り出す装置である魔女裁判に対し、名誉棄損訴訟は和解への可能性を含んだ法的営みであったと言える。